

第十五回

84年の夏から1年、文部省の奨学金を得てカリフォルニア大学サンタバーバラ校大学院で宗教学を学びました。82年弟の自死を転機に、政治経済から転じて「宗教」を見極めようとしていた私には大きなチャンスでした。その秋グライ・ラマ14世がキャンパスを訪れ、野外スタジアムを満堂にした講演を聴くことができました。

英語とチベット語を交えた穏やかでユーモア溢れる語り口は、日本人にも親しみ深い風貌とともに、今も感銘深く蘇ります。一番印象深かったのは「西洋の科学と東洋の智慧が幸せに結婚」すれば、人類は本当の「文明」を享受できるでしょう、というメッセージでした。

翌年度、今度はロータリー財団の奨学金でニュージャージー州立ラトガース大学大学院に留学。マンハッタンにあるニューヨーク仏教会に寄宿。鈴木大拙禅師が残した私設図書館で、人類のすべての宗教を一元的に通観する理論を完成できました。グライ・ラマの講演からもインスピレーションを頂きました。

歴史を学べばすぐに判ることですが、すべての「国家」は、一群の武装強盗団による暴力的な支配に起源します。「政府」は経済的には、すべての価値（財とサービスの生産）を生み出している「民間」に寄生する存在です。ただ、後付ながらも、その版図に暮らす人々の「いのちとこころ、財産」を守る限りにおいてその存在意義が認められる訳です。従って、不正な収奪（苛斂な徴税・財政腐敗）や暴力（弾圧という殺人傷害）という「本性」を現した瞬間に、その「正当性」は否定されるのです。

もともと物心を分けがちな西洋では、近代に「神を殺し」た一派が唯物論に走りました。この謬見がもともと全体主義的なアジアの民族エゴと結びつくと、最悪のリバイアサンが誕生するようです。映画『キング・フィールド』は最近の実例ですが、まだまだ最悪の「国家」がはびこっています。

「私たち人間の手足の爪を見てみましょう。猛獣や猛禽類の様な鉤爪ではありませんね。人間は、本来はやさしい生き物のはずなんです。」人類は、オリンピックに臨んで、グライ・ラマのこの素晴らしいお諭しを傾聴すべきでしょう。